高齢者擬似体験演習における学生の
「高齢者の日常生活に必要な看護」についての学び

山下美智子（愛知きわみ看護短期大学）
澤野　百合（愛知きわみ看護短期大学）

要　　約

本研究は、「生活機能」に視点をおいた高齢者擬似体験演習における「高齢者の日常生活に必要な看護」についての学びと今後の課題を明らかにすることにより高齢者看護学の授業を検討する資料を得ることを目的とした。

結果、「高齢者の日常生活に必要な看護」の学びは 208 コードであり、【安全に配慮した生活援助】【自立を支える生活援助】【安心感をもたらす生活援助】、【基本的援助技術向上の必要性】【尊厳を守る関わり】【生活の質を高める参加支援】【チームによる支援】の 7 カテゴリーが導き出された。これらは、高齢者看護を学習していくうえで重要な視点であり、生活機能に着目した高齢者擬似体験演習は高齢者の日常生活に必要な看護を思考させる学習方法の一つとして活用できると考える。

キーワード：高齢者擬似体験、生活機能、高齢者の生活

Ⅰ．　はじめに

高齢者は長い人生の中で培ってきた経験、価値観、生活様式を持ち、その人らしい生活を営んできた人である。しかし、病気や加齢的機能変化により日常生活を自立して行うことが困難になり、個人差はあるものの他者の支援を必要とする場合も増えていく状況にある。高齢者一人一人に個別性のある看護を実践するためには、その人の生活に着目することが必要不可欠なことである。現在、65 歳以上の高齢者の単独世帯や、高齢者夫婦のみの世帯が増加する傾向にあり、子供との同居率が減少している[1)]。そのような状況の中、身近に高齢者の生活を知る機会の少ない若い世代が高齢者を理解し生活に視点をおいた看護を思考することは容易ではない。これまで高齢者擬似体験による学習効果として、高齢者の身体的・心理的特徴の理解、援助的視点の気付きなどが報告されている[2)～4)]。しかし、擬似体験を通して高齢者の日常生活に着目した学習効果の検討は見当たらなかった。

2001 年に世界保健機構（WHO）は人間の生活機能と障害に関して ICF（国際生活機能分類）を提唱した。大川[5)]は国際生活機能分類モデルの基本となる概念の 1 つである「生活機能」について次のように説明している。「生活機能」とは人が「生きる」ことの 3 つのレベルである。「心身機能・構造」、「活動」、「参加」を一つにまとめた包括概念である。また「心身機能・構造」とは、体の動き（手足の動き、見ること、聞くこと、話すこと、内臓の動きなど）や精神の働き、また体の一部分の構造のこと、「活動」とは、生きていくのに役立つさまざまな生活行為のこと、「参加」とは社会のさまざまな状況に関与し、そこで役割を果たすことと説明している。要介護状態の高齢者が増加する社会情勢の中、高齢者を社会の中で生きる人として捉え、どのような健康状態にあっても個別性に合わせた質の高い生活支援が求められている。高齢者擬似体験を通して加齢による心身機能の変化を理解するとともに、「生活機能」に焦点を当てた学習を加えることにより、高齢者の日常生活に必要な看護を思考する機会になるのではないかと考えた。

今回、高齢者擬似体験演習を行うにあたり、「生活機能」の視点を活用することにより学生が、高齢者の身体的・心理的理解のみならず「活動」、「参加」を中心とした高齢者の日常生活に必要な看護についての学びと今後の課題を検討したので報告する。

Ⅱ．　研究目的

「生活機能」に視点をおいた高齢者擬似体験演習における「高齢者の日常生活に必要な看護」についての学びと今後の課題を明らかにすることにより高齢者看護学の授業を検討する資料を得ることを目的とした。

Ⅲ．　研究方法

1.　研究デザイン

質的帰納的デザイン

2.　方法

1)　対象：A 看護短期大学の 2 年生 79 名の内、高齢者擬似体験演習に出席し、研究協力の同意が得られた 59 名の演習体験レポートを研究対象とした。

2)　学習の進め方

1 年次の「高齢者看護学概論」（15 時間）により高齢者の身体的・精神的・社会的変化、

高齢者を取り巻く社会制度、高齢者の暮らしについて学習したことを土台として、2年次に受講する「高齢者看護援助方法Ⅰ」（30時間）は、高齢者の生活を支える援助方法について学ぶことを目的としている。第1回目に「高齢者のQOL 、生活機能について」の講義(2時間)を受講し、第2回目～第4回目（6時間）に高齢者擬似体験演習を実施した。授業の進行の早い段階で高齢者擬似体験演習をすることにより、高齢者の理解を深め、高齢者の日常生活について考える機会を作り、それらをふまえて高齢者の生活を支える看護について学習を進めることをねらいとした。

3）演習における学習目標と課題

生活機能に視点をおいた体験学習を生かし、「高齢者の生活を支える看護」について考察することを目標とし、その目標に対するレポートを課題とした。学生を3名の1グループに分け、高齢者役・援助者役・観察者役の各役割を交互に体験し、転倒などの事故が起きないよう十分注意しながら次の演習内容に取り組むよう説明した。［高齢者役］は、高齢者体験スーツを着用し、廊下を歩行する→エレベータに乗降する→トイレで便座に座り、トイレットペーパーをちぎる→階段昇降をする→掲示物を読む→大豆を箸でつまみ、別の皿に移す→濃淡の差がわかる2色のランチョンマットの上で折り紙をそれぞれ4つに折ることを30分以内で体験する。［援助者役］は、高齢者役が安全・安楽に実施できるように、その人の状態に応じて援助する。また高齢者役とコミュニケーションを図りながら関わる。［観察者役］は、高齢者役、援助者役を十分観察する。また演習進行を補助し、時間管理を行う。演習における学習目標は各役割で体験したことを基に生活機能（国際生活機能分類を参考）の視点で整理・考察し、演習を通して得た学びから「高齢者の生活を支える看護」について記述するとした。

4） データ収集方法

生活機能に視点をおいた体験学習を生かし、「高齢者の生活を支える看護」について記述した内容を研究データとし、そのデータの示す意味を解釈し、言葉の意味を損なわない程度に簡潔な表現にまとめた。データが示す意味内容を類型化し、コードの類似点と相違点との類別を繰り返した。類別されたコードのかたまりの特性を明らかにしてサブカテゴリーを抽出し、さらにサブカテゴリー間での類似点と相違点とを類別し、抽象度をあげてカテゴリーとしてまとめた。それぞれのカテゴリーは、その内容や性質を表す言葉で命名した。カテゴリー化などの過程において妥当性を高めるために高齢者看護学領域の研究者と検討を重ねた。

Ⅳ． 倫理的配慮

本研究はA看護短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。研究対象者に研究の目的と方法、研究協力は自由意志であること、データは学術研究のためだけに用いること、無記名で個人が特定されないことを説明し、調査の内容や協力しないことで成績・評価に不利益を受けることがないことを書面と口頭で説明した。

Ⅴ． 結果

1. 「高齢者の生活を支える看護」として記述された内容

「高齢者の生活を支える看護」としてレポートされた記述の内、文脈単位データの1内

容を 1 項目とし、文脈を変えないようコード化した。コードから類似性をもとに分類した結果を次に示す。【安全に配慮した生活援助】【自立を支える生活援助】【安心感をもたらす生活援助】、【基本的援助技術向上の必要性】【尊厳を守る関わり】【生活の質を高める参加支援】【チームによる支援】の 7 カテゴリーが導き出され、61 サブカテゴリー、208 コードを得た。抽出されたカテゴリー、サブカテゴリーは表 1-1、1-2 にまとめた。なおカテゴリーは【　】、サブカテゴリーは≪　≫、学生の記述内容は『』、データの一部を省略する場合は･･･で表記している。

2.　【安全に配慮した生活援助】

高齢者の日常生活は、加齢的変化に伴う身体機能の低下、感覚機能の低下などにより生活上発生する危険が多いことから危険を回避し高齢者が安全に生活できる援助を表し、≪危険回避する援助の必要性≫、≪環境整備により安全を確保≫、≪安全を保つケアの大切さ≫、≪見守る援助の大切さ≫、≪物的・人的環境整備により安全を確保≫の 5 つのサブカテゴリーから構成された。具体的な記述は、『環境を整え段差などがある場合は耳の近くで声をかけ少しの変化に気づき対処することができるようにすることが高齢者の生活を支える看護』、『看護する時は自分の目線で物事を捉えるのではなく、高齢者の目線で環境を捉え適宜介助や声掛けを行うことが事故防止につながる。』、『その人その人によって介入する量を調整し、高齢者の安全を保つケアを行っていくことが大切である。』、『階段等は常に自分がいることを伝えることによって安心して昇ってもらえる』、『ちょっとした段差、手すりの設置などを高齢者本人と共にその家族やサポートする人達と一緒に考え安全を確保する』などであった。

3.　【自立を支える生活援助】

高齢者の感覚機能に合わせた生活環境の工夫、情報を的確に伝え今活かせる機能を低下させず、持てる力を生かす援助により高齢者ができる限り自立した生活を送れる援助を表し、≪視覚機能の変化に配慮した生活援助≫、≪必要な援助の見極め≫、≪日常生活動作（以後、ADL と略称する）を低下させない援助の必要性≫、≪高齢者のペースに合わせた援助の大切さ≫、≪残存機能に働きかけた援助の大切さ≫、≪その人の ADL に合わせた援助の必要性≫、≪社会資源、福祉用具を活用した援助の必要性≫、≪ADL を把握し個に合った援助を実施する大切さ≫、≪環境を整えることにより ADL・QOL を維持する必要性≫、≪持てる力を最大限に発揮する援助の必要性≫、≪意欲に働きかけた生活援助≫、≪自立とその人らしい生活援助≫、≪工夫により自己摂取を維持し充実感のある生活援助≫、≪全体像を相互的に捉えることにより生活を援助≫、≪他者との交流を促すことにより生きがいを見出す援助の必要性≫、≪活動と休息に配慮した援助≫、≪できた活動を認めることにより QOL 向上≫の 17 サブカテゴリーから構成された。

具体的な記述は、『加齢に伴い色の識別能の低下や、明暗順応の時間の延長や、視野狭窄で物が見えにくくなるので・・・どこに人がいるのか、何人いるのかなどを伝えていくことが必要』、『高齢者自身で出来ることまで援助者がしてしまうのは良い看護とは言えず、その人の身体機能を活かし、なるべく筋力も使うように必要最低限な部分を援助者が支えるようにすることが大切である』、『高齢者一人一人の ADL や自立度を把握し、今までできていたことができなくならないように見守る援助が大切』、『不安を軽減させるために、声をかけたり、何か行動する時はその人のペースに合わせて、安心出来る言葉遣いをする

と良い』、『高齢者一人一人、身体機能には差があるため援助者はその人の残存機能を把握することが大切である。』、『トイレへ行く際には･･･自立を促すために手すりを設置して、まずは自分の力で立って頂き、それでも難しい場合はその人の ADL に合わせた援助方法を見つけていく必要がある。』、『早く前に進みたいと思ったり階段をスムーズに昇り降りしたいと思っていても動きがついていかないというようなことから･･･援助者は固定された机や支えとなるような手すりを利用するように伝えたり、用意する必要がある。』、『対象個々の身体機能低下や日常生活の能力を把握して対象に合った援助を見出し個別的な看護を実施することが重要』などであった。

4. 【安心感をもたらす生活援助】

生活していくうえで起こる不安な気持ちを軽減し、高齢者に安心感をもたらす援助を表し、≪安心感が得られる生活援助の大切さ≫、≪不安に配慮して生活環境を整える大切さ≫、≪心理面に配慮した援助の必要性≫、≪傾聴することにより精神を穏やかにする援助の必要性≫の 4 つのサブカテゴリーから構成された。具体的な記述は、『病気になり入院となると高齢者の方もとても不安で生活が一変してしまうので、たくさんお話しをして、今までの生活に近づけられるような援助をすると良い』、『高齢者の方と接したりサポートする際は、不安な気持ちにならないために優しく接することや、少し低めの声ではっきりと声かけをすることを忘れずにすることが重要であり、高齢者にとっても良い環境作りになる。』、『もし生活の中で失敗してしまった時、･･･身体のケアと共に精神的な面でもフォローが必要』『家族と一緒に話をする機会をつくったり･･･話を聞くことで精神面の緩和をする。』などであった。

5. 【基本的援助技術向上の必要性】

日常生活援助技術、安全安楽な援助技術、援助関係構築技術などの技術向上の必要性を表し、≪高齢者との関係性構築技術の向上≫、≪安全安楽な援助技術の提供≫、≪優先順位を決めてケアする必要性≫、≪福祉用具の適合性の観察≫、≪負担を少なくした援助の工夫≫、≪日常生活援助技術の向上≫、≪自立度を考慮した福祉用具の選択≫、≪苦痛を軽減する援助技術の向上≫の 8 つのサブカテゴリーから構成された。具体的な記述は、『信頼関係を築き、意志を表出しやすい環境を作ることやそれまでの関わりが求められ、価値観や時代背景にも配慮し高齢者一人一人を尊重し話を聞くことが大切』、『立位から座位への移動動作の援助技術は、高齢者役の人には基礎看護学技術で教わった援助ができなかったので、実際援助する時まで忘れないで練習しようと思った。』『杖の大事さがわかったと同時に自分に合った杖を使わないと使いづらいということがわかったり、援助の際にはそのようなところも観察が必要である。』などであった。

6. 【尊厳を守る関わり】

看護者として高齢者の尊厳を守る関わりを表し、≪プライバシーに配慮した援助の大切さ≫、≪一人の人として接することの大切さ≫、≪自主性に配慮し尊重する援助の大切さ≫、≪その人を尊重した生活援助≫、≪その人の意思を尊重した看護の必要性≫、≪持てる力を損うことなく高齢者の尊厳を守る援助の大切さ≫、≪ADL を判断して自尊心を傷つけないケアの必要性≫、≪敬い、思いやりを持って接する大切さ≫、≪自尊心を傷つけない言葉遣い・態度に配慮した援助の大切さ≫、≪ありのままを受け入れる大切さ≫の 10 のサブカテゴリーから構成された。具体的な記述は、『トイレでは排泄をみられるのは恥ず

かしいので終わったら呼んで下さいなど心理的配慮が必要となってくる。』、『声掛けの際には、「おばあちゃん」と呼ぶのではなく「○○さん」と 1 人の人として接する。』『QOL の低下を防ぎ高齢者の尊厳を守るためにも一人一人の意志をその都度確認し、大切にすることが高齢者を守る事に繋がる』、『心身の機能の低下を自覚するため自信を失ったり不安を増大させやすい状態にあるので言葉遣いや態度に配慮し、傷つかない援助が大切』などであった。

7. 【生活の質を高める参加支援】

加齢に伴う心身機能・活動性低下などにより生活圏が縮小しがちな高齢者に生活の質をを高める社会参加を支援することを表し、≪社会参加により生きがいづくりを支援≫、≪その人に合った参加の選択を促進≫、≪参加により QOL 向上を支援≫、≪自立を促すことにより参加意欲が向上する援助の必要性≫、≪参加により自信獲得≫、≪寄り添い参加を促進する援助の必要性≫、≪意欲が向する声掛けにより参加を促進≫、≪他者との関係性構築により参加を支援≫、≪運動を促進することにより安全な参加の獲得≫、≪生きがいや楽しさを見出すための参加の促進≫、≪コミュニケーションにより社会参加を促進≫、≪環境を整え社会参加を促進≫、≪希望を把握しサービス選択を支援する重要性≫の 13 のサブカテゴリーで構成された。具体的な記述は『高齢者が家で引きこもりがちになってしまわないように社会参加を促し生きがいを見つけるためには、援助者から日々の声掛けから外に出られるように促す支援がとても重要』、『身体的な面だけを支えるのではなく参加に対し意欲的にどうしてなれないのかを考えて一緒に解決へと導いていくために寄り添うことが高齢者を支える看護である』、『楽しみや生きがいを作り、身体が思うように動かなくても、部屋に閉じこもりがちにならないようにする』、『ADL の低下がわかり、QOL も低下する気持ちになったが、毎日の活動や参加が楽しみへと変わり QOL が上昇するような看護が提供出来たら良い』、『外は転落や事故があるため外出するのはやめましょうと言うのではなく、身体機能低下や悪化防止のために家族の方に相談したりすることも大事な看護の一つであり、その人の生きがいを無くしたりするのは良くない』などであった。

8. 【チームによる支援】

多職種連携、地域全体で高齢者の生活を支援することを表し、≪家族への精神的ケアの大切さ≫、≪多職種連携による自立支援≫、≪多職種・地域と連携し参加を支援≫、≪自立と安全を確保した包括的ケアの必要性≫の 4 つのサブカテゴリーから構成された。具体的な記述は、『高齢者の介護負担や不安に対する家族への精神面のケアをしていくことも大切』、『入院している高齢者の方に対して、・・・医療従事者全員で協力し、家に帰っても不自由のない生活をするための対策を考え、リハビリや生活行動の自立を看護師が理解し、そのための援助を考えることが大切』などであった。

Ⅵ. 考察

体験学習の指標となった国際生活機能分類モデルの基本となる概念の 1 つである「生活機能」の視点に立ち、高齢者の日常生活に必要な看護についての学生の学びと今後の課題を明らかにする。

1. 高齢者の特徴に視点をおいた日常生活に必要な看護に関する学び

【安全に配慮した生活援助】として、擬似体験を通して関節可動域の低下・筋力低下な

どによる動作困難に対して安全な環境を整えたり、視覚機能の変化に配慮して目の前の状況を伝え、注意喚起することなど≪危険を回避する援助の必要性≫に着目する学生は多かった。その理由として、加齢的変化・身体機能低下・視覚機能の変化などによる転倒・外傷など常に生活上のリスクが伴うことを体験したことにより安全な生活を第一に整える看護の視点につながったものと考えられ、他の研究結果[2)~4)]と同様の学びがあった。既習の知識として持っていた高齢者の身体的特徴を実践の中で体験することにより生活の中に潜んでいる危険因子に気づく機会となり、安全な生活環境を提供する援助の視点につながったと考えられる。しかし、住谷[6)]が述べているように、入院生活を送る後期高齢者の身体は、安全管理という視点から医療者に客観的に評価されることで、長い人生経験に裏づけられた高齢者の身体経験が尊重されにくい状況がある。リスクにばかり着目すると、高齢者のできる活動を抑制することにつながり高齢者の自尊心の低下を招く可能性もある。大川[7)]は、ICF での障害のとらえ方は、障害のある人をその障害の面だけから見るのでなく、正常な（プラス）の生活機能（「心身機能」や「活動」や「参加」）をもちつつ、そこに問題（困難、マイナス面）も持っている存在としてとらえることと述べている。学生が体験を通して看護を考えたとき、高齢者の目線に立つことや個人に合わせて介助量を考える視点を持つことができており、プラスの生活面を持つその人を尊重しつつ、生活に潜むリスク要因となる障害をサポートしていく思考のステップを踏んでいると考えられる。今後、看護実践においても安全な生活を護る看護の中核にその人らしくある生活が基盤にあることを念頭に置き､高齢者の日常生活を援助できるよう学生を支援していく必要がある。

擬似体験を通して高齢者の日常生活に視点を置いた学びは、生活の困難さに着目するよりもむしろその人のペースや状況に合わせ、残存機能や持てる力を発揮しながら【自立した生活を支援する】大切さを捉えたものであった。大川[8)]は、介護実践には、マイナス面だけでなく、プラスの面を見つけ出す、それも「専門家の目で積極的に引き出す」という考え方へと変わることが求められていると説明している。高齢者は、加齢的変化による心身機能・感覚機能低下、複数の疾患をもつことも多く、弱みを抱えていることも多いが、看護者がその人のプラスの面や持てる力を見出し、発揮できるよう援助することはその人らしさや生活の質の向上につながる。学生は、擬似体験演習において高齢者の持てる力を模索し、持てる力を活かした自立支援の援助を思考することができていた。自尊心を保ち心身共に支援することが高齢者の自立した生活支援には大切であることが学びとして得られ、他の研究結果[2)~3)]と同様であった。

【安心感をもたらす生活援助】として、学生は演習を通して、身体諸機能の低下から日常生活が今までのように行えなくなる不安を体験から感じることにより、精神面のサポートや今までの生活が継続できるよう援助することの必要性を少数ではあるが気づくことができていた。流石ら[9)]は、“終の住処”となる施設で暮らす高齢者への看護職の関わりとして、自宅と同様に安心して生活できる療養環境（人的・物的）の保障が不可欠であると述べている。今後、多様な生活の場で暮らす高齢者の様々な不安を理解し、安心した生活を援助する思考が発展するよう授業を構築していく必要がある。

これら擬似体験を通した学生の学びから【安全に配慮した生活援助】【自立した生活を支援する】【安心感をもたらす生活援助】という高齢者の特徴に視点をおいた日常生活に必要な看護が導き出された。

2.　高齢者の生活の質を高める参加支援に関する学び

学生がとらえた高齢者の「参加」は、社会参加を中心としたものであった。先行研究では、擬似体験演習から「参加」を意識的に思考させる学習は見当たらず、体験を通して高齢者の「参加」について、どのような学びがあったのかを検討した。

大川[10]は、3 つの生活機能レベルの関係性には、大きく 2 種類あり、相互に「影響を与える」という「相互依存性」と相互に「影響が及ばない」という「相対的独立性」があると説明している。その 1 つの「相互依存性」について、「心身機能」から「活動」、「活動」から「参加」へ影響が及ぶ場合と、逆の「参加」が低下すれば「活動」が低下するという関係があり、「活動」が低下すれば「心身機能」が低下する場合があると説明している。学生は、加齢による身体機能の低下を体験することにより心身の機能障害が活動制限を引き起こし、それが社会参加を困難にさせることを体験により気づくことができていた。また、活動制限から外出を控えたくなる高齢者の思いや閉じこもりという現象を理解し、それらをふまえて援助者の日々の声かけや共に考え、寄り添うことにより参加を促進できるという思考につながっていた。古田ら[11]は、研究結果から在宅高齢者の外出頻度に大きな影響を及ぼす因子は、外出時に積極的に誘ってくれる人がいるという社会的サポートの有無と、自分が他人の役に立っていると考える「役割意識」の有無であったと述べている。高齢者の参加を促進するためには、単に交通機関・送迎など移動の手段が充実していることや、公的サービスの活用だけでなく、学生が感じ取った援助者の関わりや寄り添う姿勢が社会的サポートとして有用であると考える。一方、高齢者は職業からの引退や子供の独立など、今までの役割を喪失する体験があるとされているが、高齢者の「役割意識」を充足させる活動・参加を支援する記述はみられなかった。今後、高齢者の「役割」など社会的側面に関心が向けられるよう授業を工夫していく必要がある。

3. 看護職としての姿勢に関する学び

【基本的援助技術向上の必要性】として、学生は、演習を通して自己の基本的援助技術の在り方を振り返る機会となった。援助者役・観察者役体験を通して、関わりを良くすることにより高齢者からの反応も良くなり援助関係を円滑にすることの大切さが理解でき、≪高齢者との関係性構築技術の向上の必要性≫を実感できたのではないかと考える。高齢者は、加齢的変化や疾患に伴う症状によりコミュニケーション能力が障害されたり、社会からの孤立などが起こりやすい状況にあり、他者との関係性をよりよくする援助の視点は重要である。また、高齢者への日常生活援助を提供する際には基本的な日常生活援助技術を土台に加齢的変化や個別性に配慮した援助技術、福祉用具を活用した援助が必要になるが、その点を振り返った学生は少なかった。これらのことから、今後、体験学習を想起させながら高齢者への日常生活援助技術が向上できるよう演習方法を検討していく必要がある。

【尊厳を守る関わり】として、学生は、排泄援助における≪プライバシーに配慮した援助の大切さ≫を思考していた。排泄は基本的欲求を満たし、生命維持にも関わる行為であるが、援助を受ける立場になると羞恥心を伴うためプライバシーの配慮が重要になる生活援助である。援助者が見守る中で便座に座る体験は、羞恥心を伴い、援助者の配慮が必要であるという気付きにつながったと考えられる。また、≪一人の人として接する大切さ≫、≪その人を尊重した生活援助≫など、その人を尊重した援助が高齢者の尊厳を守る日常生

活援助の大切な視点であることを捉えていた。ケアを提供する者の態度・姿勢・考え方は、ケアを受ける人の価値観や人としての尊厳に影響することを理解し、高齢者の【尊厳を守る関わり】を常に考え、実践できるよう授業の中でもさらに倫理観の育成に取り組んでいきたいと考える。

これら擬似体験を通した学生の学びから、看護職としての姿勢として【基本的援助技術向上の必要性】【尊厳を守る関わり】が導き出された。

4. 【チームによる支援】に関する学び

少数ではあるが、高齢者の退院を見据えた支援として、家族へのケア・多職種連携・地域連携・包括的ケアに着目していた。学生は、擬似体験をもとに心身の機能が低下した高齢者の生活ニーズに対応するためには看護職だけでは困難であることに気づいたと考えられる。つまり、高齢者及び家族の多様なニーズを把握し支援するためには保健医療福祉従事者が連携を取り、チームで取り組む必要があることへの思考の拡がりがあったものと考えられる。今後、体験を通して得たチームによる支援への気づきを学生間で共有するとともに、チームケアの実際を知る学習の場が必要となる。

Ⅶ. 結論

高齢者の生活に着目した高齢者擬似体験演習レポートから【安全に配慮した生活援助】【自立を支える生活援助】【安心感をもたらす生活援助】、【基本的援助技術向上の必要性】【尊厳を守る関わり】【生活の質を高める参加支援】【チームによる支援】の 7 カテゴリーが導き出された。これらは、高齢者看護を学習していくうえで重要な視点であり、生活機能に着目した高齢者擬似体験演習は高齢者の日常生活に必要な看護を思考させる学習方法の一つとして活用できると考える。今後、次のステップである「高齢者の生活を支える看護」を学習していくにあたり、体験を想起させながら高齢者の健康を支えるケアの基本的知識・技術を構築していくとともに看護専門職者として高齢者の尊厳を守る姿勢を重視し、高齢者とその家族の多様なニーズに対応するために多職種連携、チームの一員としての看護職の役割など専門性を高める意識が発展するよう授業展開を検討していく必要がある。

Ⅷ. 研究の限界と今後の課題

今回の演習における学生の学びに関する研究は、学生個々がレポートした学びの内容を分析したものであり、学生全体の学びとして明らかにしたものではない。今後、個々の学びを学生全体で共有していく必要がある。また、今回の研究から得られた学びを更に看護実践に役立つよう発展させていく必要がある。

引用文献

1) 内閣府：平成 29 年版高齢者白書（全体版）
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/sl_2_1.html
(2017,9,25 参照)

2) 竹田恵子,兼光洋子,太湯好子:高齢者擬似体験による高齢者理解の可能性と限界―実施時期による学習効果の違い―,川崎医療福祉学会誌,11(1),65-73,2001.

3) 室屋和子,佐藤一美,出口由美,他 3 名：老人看護学における高齢者擬似体験による学び

―対象理解と援助者の役割―,産業医科大学雑誌,26(3),391-403,2004.
4) 岡本紀子,高田大輔,泉キヨ子:高齢者疑似体験における体験と観察を通しての看護系大学１年生の気づき,帝京科学大学紀要,9,139-145,2013.
5) 大川弥生:「よくする介護」を実践するための ICF の理解と活用,18-21,中央法規出版株式会社,東京,2009.
6) 住谷ゆかり：入院生活を送る後期高齢者の「援助を受ける体験」―看護援助に焦点をあてて―日本看護研究学会雑誌,37(1),83-93,2014.
7) 5)再掲,26.
8) 5)再掲,66-67.
9) 流石ゆり子,伊藤康児：終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者の気がかり・心配,山梨県立大学看護学部紀要,10,27-35,2008.
10) 5)再掲,56-58.
11) 古田加代子,流石ゆり子,伊藤康児：在宅高齢者の外出頻度に関連する要因の検討,老年看護学,9(1),12-20,2004.

表 1-1 「高齢者の生活を支える看護」についての学び

カテゴリー	サブカテゴリー	記述数
安全に配慮した生活援助	危険回避する援助の必要性	23
	環境整備により安全を確保	12
	安全を保つケアの大切さ	4
	見守る援助の大切さ	2
	物的・人的環境整備により安全を確保	2
自立を支える生活援助	視覚機能の変化に配慮した生活援助	20
	必要な援助の見極め	16
	ADL を低下させない援助の必要性	14
	高齢者のペースに合わせた援助の大切さ	9
	残存機能に働きかけた援助の大切さ	7
	その人の ADL に合わせた援助の必要性	7
	社会資源、福祉用具を活用した援助の必要性	5
	ADL を把握し個に合った援助を実施する大切さ	4
	環境を整えることにより ADL・QOL を維持する必要性	3
	持てる力を最大限に発揮する援助の必要性	2
	意欲に働きかけた生活援助	1
	自立とその人らしい生活援助	1
	工夫により自己摂取を維持し充実感のある生活援助	1
	全体像を相互的に捉えることにより生活を援助	1
	他者との交流を促すことにより生きがいを見出す援助の必要性	1
	活動と休息に配慮した援助	1
	できた活動を認めることにより QOL 向上	1
安心感をもたらす生活援助	安心感が得られる生活援助の大切さ	3
	不安に配慮して生活環境を整える大切さ	2
	心理面に配慮した援助の必要性	2
	傾聴することにより精神を穏やかにする援助の必要性	1

表 1-2 「高齢者の生活を支える看護」についての学び

カテゴリー	サブカテゴリー	記述数
基本的援助技術向上の必要性	高齢者との関係性構築技術の向上	9
	安全安楽な援助技術の提供	2
	優先順位を決めてケアする必要性	1
	福祉用具の適合性の観察	1
	負担を少なくした援助の工夫	1
	日常生活援助技術の向上	1
	自立度を考慮した福祉用具の選択	1
	苦痛を軽減する援助技術の向上	1
尊厳を守る関わり	プライバシーに配慮した援助の大切さ	7
	一人の人として接することの大切さ	3
	自主性に配慮し尊重する援助の大切さ	2
	その人を尊重した生活援助	2
	その人の意思を尊重した看護の必要性	1
	持てる力を損うことなく高齢者の尊厳を守る援助の大切さ	1
	ADL を判断して自尊心を傷つけないケアの必要性	1
	敬い、思いやりを持って接する大切さ	1
	自尊心を傷つけない言葉遣い・態度に配慮した援助の大切さ	1
	ありのままを受け入れる大切さ	1
生活の質を高める参加支援	社会参加により生きがいづくりを支援	6
	その人に合った参加の選択を促進	3
	参加により QOL 向上を支援	2
	自立を促すことにより参加意欲が向上する援助の必要性	2
	参加により自信獲得	1
	寄り添い参加を促進する援助の必要性	1
	意欲が向上する声掛けにより参加を促進	1
	他者との関係性構築により参加を支援	1
	運動を促進することにより安全な参加の獲得	1
	生きがいや楽しさを見出すための参加の促進	1
	コミュニケーションにより社会参加を促進	1
	環境を整え社会参加を促進	1
	希望を把握しサービス選択を支援する重要性	1
チームによる支援	家族への精神的ケアの大切さ	1
	多職種連携による自立支援	1
	多職種、地域と連携し参加を支援	1
	自立と安全を確保した包括的ケアの必要性	1